

御霊によって歩きなさい

「ガラテヤ人への手紙」5章16～26節までを朗読。

16節「わたしは命じる、御霊によって歩きなさい。そうすれば、決して肉の欲を満たすことはない」。

イエス様の救いにあずかり、神様を信じる者とされたのは、私たちの努力や熱心なわざによるのではないと、聖書では語られています。恵みによって救われたのである。そして神様は私たちに大きなみわざを下さいました。それは、私たちのうちに、神の霊、キリストの霊、聖霊を注いで下さったことです。

イエス様は弟子たちと三年半近くの生涯を共に致しました。その中で、神様が弟子たちに求められたのは、イエス様と共に歩むことです。具体的な生活を通して、主と共に生きる幸いを味わうことができました。しかし、イエス様はゴルゴタの丘で、十字架に処刑され、死んで葬られました。目の前に、具体的に彼らを指導してくれるもの、導くものが居なくなってしまう。私たちもそうですが、一緒に生活する人の立ち居振る舞い、言葉遣い、いろいろなものを見ながら、それを真似ていきます。身に着けていきます。子供が成長していく時がそうです。親と一緒にいつも生活しています。そうしますと、子供がどんどんと親に似るものになっていきます。不思議なもので、子供たちが集まっているところを見ていると、

誰の子であるかがわかります。親の立ち居振る舞い、言葉遣い、しぐさ、そういうものが映っているのです。だから、弟子たちが三年半、この世にあってイエス様と共に歩むことは、幸いな恵みの時であったと思います。主と共に歩むこと、生活することが、どういうことかを教えて下さった時期であります。

やがて、イエス様は、彼らの目から、肉体をもったキリストとしてのイエス様は、見えなくなってしまう。そのことをイエス様はあらかじめ知っておられました。私たちでもそうですが、親子がいつまでも一緒にずっとお続ける、この世に生き続けることは、どんなに高齢化社会になっても、それは無理な事でしょう。必ず死ぬ時がきます。そしていくら愛する人でも、死別する、何かの事情で、別れは必ずやってきます。どんなに親しく、愛していても、共白髪までと、そうは言っても一緒に居続けることはできません。人と人、肉体を持っている限り、私たちは消え去っていきますから、いくらイエス様と一緒にいたいと思っても、イエス様の使命が果たされた時、もはや彼らはイエス様を見ることができない。共に生活することができない状況に陥ります。

その時に、イエス様が彼らに言い残したことは、「父の約束を待ちなさい」ということですね。神の聖霊、神の力、キリストの霊が、あなたがたに注がれる時が

来る。だから、エルサレムにとどまって、父の約束のものを受けるまで待ちなさい、と命じました。イエス様は、彼らの目から、肉体をもった主は消えてしまうことをご存じだったからです。その後の弟子たちの地上における生活はどうなるのか、皆目わかりません。ただ御霊が与えられるから、それに聞き従うようにと、イエス様は言われたのです。イエス様はよみがえられてから、彼らと共に歩いて下さいましたが、40日後、彼らのみている前から、天に帰っていかれます。文字通り、すっかり見えなくなってしまう。墓に行っても、そこは空っぽです。教会の納骨堂に行けば、召された方々の骨くらは残っていますが、それでは何の役にも立ちません。どうもしようのないことです。単なるカルシウムのかたまりと言いますか、骨でありますから、それをいくら見ても、よみがえってくるわけではありません。イエス様については、その痕跡すらもなくなってしまいました。

イエス様は、父のみもとに行くならば、わたしは父にお願いして、あなたがたのために助け主、真理の御霊、聖霊を注ぐと約束しています。彼らは、それが具体的にどういうものであるか、何一つわからなかったのです。どんな事が起こるのか。約束と聞いているが、それが何なのか。しかし、言われたごとく、エルサレムの一つの所に集まって、ひたすら待ち続けました。イエス様がよみがえられて40日、それからさらに10日後、五旬節の日です。弟子たちは一つ所に集まっていました。そこへ神の霊が注がれた。そ

こを読んでおきましょう。

「使徒行伝」2章1～4節を朗読。

いつまでであるかわからないが、イエス様が父の約束を待てと言われて、ひたすら祈りつつ、待ち続けてきたのです。10日程経った五旬節の日に、いつものように彼らが集まっていました。その時、激しい、異様な物音を聞きました。2節に、「突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて」と。激しい風、具体的に扉が吹き飛ばされたとか、そういう物理的な意味での風ではありません。吹いてきたような、です。それは一つの譬えです。そういう物音が響き渡った。そして、「舌のようなもの」、これもよくわからない現象ですが、これも譬えです。そして「ひとりびとりの上にとどまった」。それが見えるかたちで、どういうものであったか、言葉で説明できない。神様の不思議なわざですから、人の言葉でそれを言い表してしまうことができません。

その時に、彼らは大きな変化を体験します。それが、4節にありますように、「一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した」と。神の霊が彼らのうちに宿った時に、新しい言葉、いろいろな国の言葉で語り出す。これが一つの証しでした。新しい言葉、生まれ育ったガリラヤの言葉ではないものを自在に操る。言うならば、これは力の象徴です。新しい、彼らがこれまで体験してきたものとは全く違う力、権威、そういうものを、彼らは受けたと

いうのです。そして、このことは、今も変わらない約束です。神様は、私たちにこの聖霊を注いだとおっしゃる。言うならば、私たちに力を与える。私たちに与えられた力は何をする力か。人とけんかして、相手を打ち倒す力か。そうではありません。内にある力とは、神様の性質、性情、そういうものに、私たちが変わることができる力なのです。私たち自身が新しい命に生きること。それまでの聖霊を受ける前の自分。救いにあずかっていた時代古き自分が、キリストの霊に満たされることによって、新しく生きる命が与えられる。これが力です。御霊、聖霊は、私たちのうちに、新しいキリストの命となって宿って下さる。これが、この時体験した大きな出来事です。

弟子たちに聖霊が満たされると、彼らは今まで知らなかった言葉を自在に操ることができるようになった。言い換えますと、それまでの古い生き方から、今度は新しい命に生きる力、新しい命が注がれたのです。その後、この御霊によって、私たち一人一人が神様を深く知り、神様と交わる者となるのです。御霊、神の霊は、「神、我らとともにいます」、インマヌエルの神となったのです。御霊が私たちの内に宿っておられることに他なりません。御霊は、父なる神様の分身と言いますか、神様ご自身でもあるのです。父なる神、子なるキリスト、聖霊なる神という、三位一体の神でいらっしゃいますから、イエス様が私と共にいらっしゃるといことも、神様が私と共にいて下さいますといことも、それは御霊が私た

ちに宿っておられるということ。神の御霊が私の内にありますということは、キリストが私の内におられますということであり、また神、我とともにありますとの具体的な証しであります。

今は「聖霊の時代」とよく言われますが、私たちにとって、一番身近な神なるお方は、御霊ご自身、聖霊なる神ご自身です。その御霊は、私たちの内に住んで下さる。すなわち、神の御子、罪なきお方が罪人とされ、罪に支配され死んでいた私たちをあがなって、罪をきよめて、神ご自身が内に宿って下さる。“内住のキリスト”という言い方をしますが、そのためにキリストは遣わされて下さった。そのことを信じる者。イエス・キリストを神の子と信じる。救い主と信じる。その人に、神様は約束の御霊を注いで下さる。これは神様の約束であり、またそれが具体化された証しが、ここに語られているのです。では、昔の弟子たちに与えられて、今、私たちにはどうなっているのか。今、神様は、信じる私たち一人一人に、神の霊、キリストの霊を注いで下さる。その先を少し読みたいと思います。

「使徒行伝」2章17～18節を朗読。

これは神様が預言者ヨエルを通して語られた、後の世に与えられる神様の約束の成就を預言した言葉です。「わたしの霊をすべての人に注ごう」。神様は、すべての人に、キリストの霊、神の霊を注ごうと約束して下さった。と言って、私たちが、生まれながらのままではその霊を受

けることができない。というのは、私たちは、神様と何もつながりがなかった。かつては、神なく、キリストなく、一切の神様の祝福と恵みには届かない。罪を犯した結果、神と人とが相交わることができない世になってしまった。今でも、なお多くの方はそういう中に置かれています。私たちの汚れ、罪など、神様と私たちを隔てていた一切の障害を、イエス様を取り除いて下さった。自らの罪を認めて、イエス・キリストが私のため身代わりとなって、のろいと刑罰を受けて下さったのだと信じ、感謝する者の心と思いをきよめて、神様はすべての人に霊を注ぐと。それは男女にかかわらず、年寄り若い者にかかわらず、あるいは、民族にかかわらず、すべての人なのです。

イエス様が、十字架に命を捨てて下さったのは、ある特定の階層の人、ある特定の人のためだけでは決してない。それどころか、すべての人がイエス様のゆるしと、主の贖いにあずかることができる時代に、私たちを置いていらっしゃる。ただ、それに気づいて、自らがそれを求めなければ得られないのです。私たちは、はからずも、神様のあわれみにあずかって、そのことに気づかされ、主イエス・キリストを信じる者と変えられました。私たちに神様は約束の御霊を注いで下さっています。自分にもか。そうなのです。そこを信じるのが大切です。御霊が私たちのうちに宿って下さったことを、何によって調べることができるか。できないのです。ただ、聖書の言葉に約束されたように、イエス様がこうして天にお帰

りになったら、父のところからわたしの霊を遣わすと約束して下さった約束が、今、具体的にペンテコステの事柄を通して、このように注がれたのだという証しです。今、私たちはこの証しを信じて、約束のみ言葉を信じて、私にも神の御霊が宿っておられますと信じるのが大切です。

そんな勝手に信じていいのかしら。どうぞ勝手に信じて下さい。私にキリストの霊が宿っておられる。それが証拠に、今、こうして聖書の言葉を読んで、感謝し、喜ぶことができる。神様のお話を聞いて、心に燃えるような思いを与えられるのは、御霊が働いて下さるからです。ただ単に、知識で、頭で理解するだけでは得られません。私たちは何一つ聖書知識があるわけではありません。聖書の成り立ちとか、学者と言われる人たちがいろいろと研究しますが、そういうものを何も知りません。しかし、単純に聖書の言葉が神の言葉だと信じて、その言葉に信頼してみる時、具体的に御霊が働かれるのです。それはすでに具体的に経験しておられることですが、案外それに気づかないで、やり過ごしています。キリストの霊、新しい命が与えられる。それは力です。その力は私たちを造り変えて、神の性質に似るものと変えて下さる。

聖書を読んで、祈りをもって、神様の前に心を注ぎ出していく時、御霊は私たちの思いを父なる神様に取り次いで下さる。そのことは、「ローマ人への手紙」8章に語られている通りです。私たちに宿

った御霊は、私たちの祈りを父なる神様にとりなし、取り次いで下さる。私たちは身勝手な祈りしかできません。しかし、それをみこころにかなうものにとりなしで下さる。今、御霊が共にいることによって、神様との交わりが果されるのです。もし御霊が与えられなかったとすれば、どうやって神様と私たちとは交わることができるでしょうか。神様はあくまでも造り主、すべてのものの根源でいらっしゃるお方であります。それに対して、私たちは造られたものでしかありません。こういうものが、造り主なる神様と共に交わることができる。この交わりを具体化してくれる力が、御霊、聖霊です。だから、私たちがイエス様の事を聞いて、喜び、神様を信じることができ、信頼することができるのは、御霊の力、聖霊の働きとしか言いようがない。またそのために、御霊が私たちに与えられたのです。

イエス様と弟子たちが、ピリポ・カイザリヤに行かれた時、弟子たちにイエス様は尋ねました。「世間の人にはわたしの事を誰と言っているか」。弟子たちはいろいろな事を言います。預言者であるとか、バプテスマのヨハネの再来であるとか。その時、ペテロが、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と告白しました。今、目の前に見ている、大工ヨセフの子として育って来た三十歳を越えた大人を目の前にしながら、「あなたこそ、生ける神の御子、キリスト、救い主です」と言えるのでしょうか。自分の考えから言うと、自分の見ている事、聞いている事、手で触る事、具体的にイエス様と生活してい

る、また、イエス様は時折不思議なわざをしてすばらしい先生であることはわかる。しかし、この人が神の御子、神ご自身であって、しかも救い主であると信じるのでしょうか。私たちの救いのために来て下さった。その救いは、私たちの罪をあがない、きよめ、神と共に生きる者へと導き入れるお方。イエス・キリストは神の子であると信じる。これはどう考えても、難しい。しかし、ペテロがイエス様の事を、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と言い得たのは、その後、イエス様がおっしゃったように、「あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である」。父の御霊によるものであることを、はっきりと語っています。目の前の大工ヨセフの息子として育ってこられた人物、兄弟もいましたし、この人こそが生ける神の子キリストですと信じる事ができたのは、すでに、ペンテコステに先立って、神の霊がペテロに働いて下さった。

それと同じように、今、私達も聖書のお言葉を信じて、主イエス・キリストが神の子であると信じる者となった。これは神様の霊の働きによるのです。そのことを思う時、こうやって救いにあずかった者にとって、御霊が私と共におられると言う他ないのです。そういう御霊が、私たちのうちにあって何をするのか。もう一度、初めの「ガラテヤ人への手紙」に戻ります。

5章16節に、「わたしは命じる、御霊によって歩きなさい」。この御霊は、私た

ちの内に注がれた神の霊、神の力であって、それは私たちのこの地上での生活を導かれる方なのです。しかも、その目的は私たちの内なるものをきよめることです。新しい命を私たちの内に輝かせることです。だから、御霊によって歩きなさい。私たちが神様のみこころにかなう者となるために、御霊は私たちの内に宿って下さったのです。それが新しい命に生きることです。では、それまでの命は何であったか。それは肉の命です。私たちは肉体をもって生きている。この生きるという言葉は同じですから、間違えやすいのですが、命というと肉体の命を考えます。健康であるとか、生活に支障がない、五体満足であるから、元気であり、命があると、世間の人を思います。また私達もそう思います。だから、この命さえ少しでも長くと、多くの人をそう思います。しかし、それはあくまでも肉の命です。私達にとって、もう一つの命を神様が与えて下さる。これが神の御霊です。これまで肉にあって生きてきた私達に、もう一つ別の命である御霊が注がれた。御霊は私達といつも、どんな時も、共にいて下さる。そればかりか、私達を導いて下さる。どのように導くのか。神様のみこころにかなう者にする。神様が造られた人としての初めのかたちに造り変えて下さる。

というのは、私達は神様に造られ、神様のかたちにかたどられ、そして命の息を吹き入れられ、生きるものとなった。私達が罪を犯した結果、まことの命、それを失って、肉の命で生きるようにな

った。その肉の命は神様に敵対する力、サタンの力です。サタンの力にとらえられて、長くそれに縛られてきたと言いますか、その支配の中に置かれていた。肉の力、肉の命が私たちのすべてとなってしまう。その結果、私達は神様の目的にかなわないものになってしまう。罪を犯した結果、神様からエデンの園を追われて、人はただ、肉にあって生きる存在になってしまった。行き着く先は永遠の滅びです。罪と咎とに死んだ私達を再び生きる者にするため、神様は御子を世に遣わし、私達を十字架によってきよめて下さった。とって、完全にきよくなった、新しいキリストの霊に満たされて、どこをとっても非の打ちどころがない創造のみわざが私達のうちに具体化されていると言えるか、と言われると、到底そうは言えません。現実の自分を見ると、まだ欠けだらけ、足りないだらけ。それどころか、今なお罪の力に翻弄されてしまう自分であることはよくわかります。

だから、私はダメかと言うと、そうではなくて、今、信仰によって、信じることによって、神の御霊が内に宿って、私達を造り変えて、永遠の命が輝くようにと、御霊は、日夜、私達の内に働いて下さるのです。だから、私達は今、肉にあって生きるのではなくて、キリストの霊、御霊によって歩く。これ以外はないのです。私達が神様に造られた、まことの人として、正しい生き方、あるいは欠けのない、神様の前に神の栄光を担う器として生きる者となる。自分の力

ではできない。私たちには肉の力しかありません。その肉の力を打ち破って、神の霊に満たされ、神様のわざによって新しく造り変えられていく。これが、今、救いにあずかった者の生き方です。私たちは日々この地上にあって生きていますが、しかし信仰によって、神様が注いで下さった御霊が働いて下さっている。その御霊の導かれるところに従う。これ以外に、私たちは神様の目的にかなうことができない。神様は御霊によって、私たちをきよめて、なお一層神の栄光の器として造り変えて下さる。

16 節に、「わたしは命じる、御霊によって歩きなさい」。御霊がいつも私たちの内において、絶えず行くべき道を示して下さい。なすべきわざを備えて下さる。私たちの心と思いを光で照らして下さい。毎日読む聖書の御言を通して、御霊は私たちに光を照らして下さい。まだ処分されない、残っている肉の汚れを、一つ一つ取り除く力は、御霊によるのです。ですから、日々、祈りと御言によって、御霊の導かれるところに従う。これが、一生涯、私たちに求められている大きな神様の使命です。なぜなら、私たちを造り変えて、建て上げて、神様はご自身の栄光の器にしたいと願っているのです。御霊は私たちの内に働いて下さる。それによって、キリストの栄光とされていくのです。キリストがほめたたえられるべきお方となるために、神様は私たちを造り変えようとして下さる。これが 16 節に、「わたしは命じる、御霊によって歩きなさい。そうすれば、決して肉の欲を満た

すことはない」と。自分の肉なるものを自分の力で追い出そう、きよめようとしても、これはできません。しかし、ただひたすら、一歩でも半歩でも、御霊の導かれるところに従う時、従う者に神様は恵みと力を与えて、私たちは造り変えられる。

この新しい年もいろいろな事に出会いますが、まず求められていることはこの事です。御霊によって歩きなさい。今、私は、何を動機として、何を自分の拠り所として判断し、選択し、決断しようとしているのか。日々の生活、いろいろと迷うことがたくさんあります。右にするか、左にするか、進むか、とどまるか、こっちがいいだろうか、あっちがいいだろうか、その時、肉の働くところになるのです。こうした方が私にとって楽だし、こうした方が得になる。そこで、こうしたことは御霊が喜ばれることだろうか。神様がそのことをよしとしているだろうか。一瞬立ち止まって、主を求める。主に聞く。買い物をするにしても、スーパーマーケットで値段を見て、パツパツと、「こっちの方が安い」と。その時、決めている心は何か。どちらが得するかです。肉の働きとはそこです。そうしますと、「ああ、今日はいいい買い物ができた」。「なぜ」。「あれも安かった、これも安かった。誰よりも私は得した。私はやっぱり主婦としてしっかり者」。そんな事を誇ろうとするから、御霊が働かない。ストップしてしまう。その結果、感謝できない。「神様、これもあなたの恵みによって、こうなりました」と言えるのは、

御霊に従って歩んだ結果です。だから、いろいろな事を祈りつつ、時々刻々、どんな小さな事も、大きな事も、そこで、「主よ、このことのみこころはどこにありますか。あなたは何をここでさせますか。私は行くべきでしょうか。やめるべきでしょうか」と、常に、御霊に聞くということです。そうしていきますと、自分の心ではない自分が造り出される。新しい自分に変わっていくのです。

「わたしは命じる、御霊によって歩きなさい。そうすれば、決して肉の欲を満たすことはない。なぜなら、肉の欲するところは御霊に反し、また御霊の欲するところは肉に反するからである」。御霊と肉とは相容れない。これは決して一緒にはなりません。私たちが御霊に従いますと心を定め、「はい、このことはあなたから出たことですから、信じて、このことをさせていただきます」と踏み出していけば、御霊は私たちに喜びと平安と望みとを与えて、心豊かに変えて下さる。光にあふれるものとして下さる。そして、事が終わった時、「これまで、神様はこんな事を私にさせて下さった。主よ、ありがとうございます」と感謝できるのです。

ところが、その取り掛かりに、どっちが得するだろうか、どっちが大きいだろうか。すぐそういうことを考える。そして肉の思いで事を測りますと、うまく行って当たり前。行かないと、人をうらみ、また自分の力のなさをかこって、劣等感に陥る。決していい結果はどこにも出て来ない。御霊は、必ず「右にすべき、左

に行くべし」と語って下さるところがありますから、一つ一つ、小さな事も大きな事も、そこで祈りつつ、祈りつつ、御霊に導かれていますと確信できる生き方を選びとって行きましょう。そうすれば、必ず御霊の実を結ぶことができる。22節以下に、「御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって、これらを否定する律法はない」。その通りです。神様は私たちの性情、性格を造り変える。目に見える驚くべき事業や結果を残すことではない。信じる私たち自身が造り変えられて、栄光の姿になっていく。最後に一言だけ、読んでおきます。

「コリント人への第二の手紙」3章16～18節を朗読。

この最後のところに、「これは霊なる主の働きによる」とあります。私たちと神様の間を隔てていた罪のおおいが、十字架によって取り除けられて、私たちがキリストを目の当たりに見ていく時、私たちの罪は取り除かれて、神の栄光を見ることが出来る。十字架に現わされた神様の栄光を、鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に、キリストの姿かたちにまで、私たちを変えて下さる。それは私たちの働きではない。自分の努力や自分の熱心なわざによってではなくて、霊なる主の働きによるのである。私はいつもこの言葉によって、励まされ、慰められます。つい、自分の様子を見ると、できていない、なっていないと思えます。これでは死ぬまでに間に合わない。

そんなくらいに思います。しかし、それは自分がしようと思うからです。そうではなくて、御霊が絶えず働いて、私たちが造り変えようとして下さる。私たちのすることは何か。ただひたすら「**御霊によって歩きなさい**」です。御霊に信頼し、御霊の導かれる所に歩いていくならば、栄光から栄光へと私たちが主と同じ姿に変えて下さる。

この望みをしっかり心に置いて、「御霊によって歩きなさい」と言われますから、この年もいろいろな事の中で、絶えず主を前に置き、右に置き、御霊の導かれるところ、御声に従って、力一杯主に従っていきたいと思う。そうする時、神様は、私たちを整え、きよめて下さる。私の心と思いをきよめて、神の姿、キリストの姿へと造り変えることが、神様の目的なのです。この世にあって成功し、名を成し、銅像の一つや勲章の一つをもらうための人生ではない。そういうこの世のものはすべて消えていくものです。ひとときのものであります。ですから見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えないお方、キリストの霊が、私たちの内に、今日も働いて下さる。力を振るって下さる。その御霊の御声に従っていく。主によって歩く。御霊によって歩こうではありませんか。

初めに戻りますが、「ガラテヤ人への手紙」5章16節、「わたしは命じる、**御霊によって歩きなさい**」。どうぞ、人の事がどうであれ、今、私は、主と私、あなたに私は従っていきますと、主の導かれる

ところにしっかり心を向けて、この日々を歩みたいと思います。

ご一緒にお祈りいたしましょう。